

青山教会会報

「試練の中で」

申命記三一章七〜八節

コリントの信徒への手紙一

一〇章二二〜二四節

牧師 増田将平

「神は耐えられないような試練に遭わせることはなさらない」。よく知られているロックバンドのメンバーがこの言葉を座右の銘として紹介していました。なぜこの言葉が支えとなるのでしょうか。試練に遭遇したときに何を信じるのか問われるからではないでしょうか。自分を信じるのか、それとも自分の力を超えた存在を信じるのか問われるのだと思います。

パウロは前のところで、神様がイスラエルの人々の叫び声と痛みを受け止め、モーセを立て、イスラエルの人々をエジプトから脱出させ、約束の地に向かって

旅をさせたことに触れています。この手紙を受け取った教会の人々とは時代も状況も異なります。それでも共通していることがあります。神を信じて生きる人生があるということ、この人生は「旅」であり、目的地までの道のりは試練に満ちているということです。そしてこの旅は、独り旅ではなく、仲間たちと歩む旅です。

キリスト者であった作家トールキンは『指輪物語』を記しました。この物語で仲間たちは旅の途上で多くの試練に遭います。この物語のテーマは「悪との戦い」です。彼らが旅の目的地まで持ち運ぶ「指輪」は悪の象徴ですが、旅の仲間の心の中にも存在する悪があります。試練の中で悪が働き出すのです。悪は誘惑する力です。この時誰もが悪の力に負けそうになります。誰も一人でこの旅を続けることはできないのです。神を信じる旅も同じです。この旅は険しく、誰も一人で旅路を全うできません。そのために神は教会を建てられました。教会は、共に地上を旅する神の民です。旅の同行者は仲間たちだけではありません。エジプトを脱出したイスラエルの人々は、様々な試練に遭いました。しかし、どんな時も神に伴われて旅を続けてきました。それなの

に旅が長引くと、イスラエルの民は不平を言い始めました。

「こんな苦勞をするくらいなら、いっそのことエジプトで奴隷のまま死んでいたらよかった」

モーセが神に会うため山に登ったままなかなか降りてこない、「神様は私どもを見放されたのに違いない。もっと信頼できるものを俺たちの手で作ったらいい」と言い出して金の子牛を作り上げ、完成した金の牛を指差して言いました。

「これこそが、あなたがたをエジプトから導いた神々だ！」

これが神に救われ、神と出会った人々がしたことなのです。偶像とは、神以外で、私どもが頼りにしている全てのものにつけられる名です。偶像を造ったのは自分ですから、偶像に頼るといえるのは、結局自分に頼っていることと同じです。

試練において苦しむ時、自分の苦しみは特別だと思えます。「自分ほど苦しんでいる人はいない。これは、自分だけにしか分からない苦しみだ」。そう思い詰めて悪を行ってしまうのです。イスラエルの人々は、試練の中で、旅の目的を自分たちの欲望を満たすことに変えてしまいました。試練の中で偶像を拝み始め、道

を踏み外すのです。

「こういうわけですから偶像礼拝を避けなさい。この手紙を受け取ったコリントの教会もまた、試練の中で偶像礼拝に陥っていました。教会内の党派争いがあり、裁判事があり、神殿で売春婦を買う信者たちがいます。パウロは言います。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかった」
 「いかなる試練でも世の常ではないものはない。こういう苦しい目にあつたのは、あなただけではない。わたしと同じような試練にあつている人がいると言います。私どものこの状況は、東京都、日本だけではなく、世界で起きていることです。全く同じでなくても、過去においても聖書の時代にも厳しい試練に遭つた人々がいたのです。

そしてあの言葉が続きます。

「神は耐えられないような試練に遭わせることはなさらない」

多くの人の支えとなつている言葉には、理由が記されています。

「神は真実な方だから」

私どもは試練の中で誰を信頼するのか。それは私どもが信じていることができる真実

な人でしよう。パウロは告げます。

「神は真実な方です」

テモテへの手紙二の二章の言葉です。

「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる」

聖書は人間を理想化しません。人間の中には真実はないというのです。コリントの教会の人々は真実を失っていました。神は私どもの中にある不誠実を知つておられます。それにもかかわらず、神様はご自身の真実を曲げることはありません。 「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる」

神の子であるお方、イエス・キリストは、クリスマスに私どもと同じ人となり、私ども同様に試練と誘惑に遭つてくださった。キリストの人生にとつての最大の試練は、すべての人の身代わりとなつて十字架につくことでした。キリストが十字架についてくださったのは、私どもが誠実ではないから、真実を失っているからです。

キリストは十字架で死なれましたが、復活して、最大の試練である、死に勝利してくださいました。私どもを罪の奴隷から救ってくださいました。神の「真実」とは神の私どもへの愛のことです。

キリストは言われました。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」

私どもに襲いかかるあらゆる力よりも、神様は強いのです。試練の中で、私どもは八方塞がりと思え、すべての道が途絶えたと思います。「わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした」。パウロの体験です。彼はこのように言います。「わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失つてしまいました。死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました」

「神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださいましたし、また救ってくださいることでしよう。これから救ってくださいるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています」

神は試練の中にある私どものために、「逃れる道」を開いて下さいます。その道は、真実のない私、力の弱い私でも通ることが出来る道です。私どもに開かれる逃れる道、それは、神の真実の道、神の愛の道です。(五月三日主日礼拝要旨)